

# 連合複数、複数代名詞構造、共格\*

## ——日本語名詞句の類型的理解に向けて (1)

猪 熊 作 巳

### 1 はじめに

本研究では名詞句の数 (number) の表示形式およびその解釈様式について言語横断的なパターンを整理し、そこでみられる興味深い構造—連合複数 (associative plural)、複数代名詞構造 (Plural Pronoun Construction PPC)、そして共格 (comitative) —の生起に言語類型論的な相関性がみられるのかについて検討する。現時点では研究アジェンダの提示にとどまるが、言語間比較と構文間比較を縦横に組み合わせることで、日本語名詞句の類型論的理解に向けた枠組みが得られることを示したい。紙幅と時間の制約上、今後いくつかの稿に分けながら論を進めていきたいと考えているが、本稿ではまず日本語と英語型ピジン・クレオール諸語にみられる複数性の問題について考えていこう。

名詞の数に関わる現象は、もっぱら形態論的な問題として扱われることが多い。ある個別言語において、名詞の数が形態的に区別されるかどうか、区別される場合、その情報は接辞によって表示されるのか (その場合、接頭辞、接尾辞、あるいは接中辞など、いずれが用いられるのか)、独立した語によって表示されるのか (その場合、その語は当該の名詞に先行するのか後続するのか)、あるいは母音交替によって表示されるのか。さらにこれらの区別は義務的・斉一的なものなのか、それとも随意的なものなのか。

意味的な側面を考慮に入れると、事態はよりいっそう複雑になる。複数性の表示に関して、「人間／非人間」や「生物／無生物」といった意味的下

位分類が必要なのか。その複数性が意味するのは同質的グループなのか、連合的グループなのか。

加えて連合的複数は並列構造との意味的近似性も高く、この延長線上に共格構造、さらには複数代名詞構造、ひいては代名詞そのものの内部構造の検討も射程に入ってくる。

とりとめのないかたちでキーワードを列挙したが、次節以降これらの現象それぞれについて代表的な事例を整理し、名詞の数に関わる研究が背景に据えるべき全体像を素描し、その中で日本語の名詞がどのように位置づけられるのかについて論じていく。本稿ではまず日本語の複数性を取り巻く問題を概観したのち、ピジン・クレオール諸語の複数性に関するデータを提示することで、名詞句の複数性に関わる分析上の問題点を提示する。

## 2 名詞句の複数表現

本節では名詞の数をとり巻く現象について、典型的な事例を挙げながら論点を整理していく。

### 2.1 同質複数と連合複数

名詞表現が複数の個体を意味するというとき、その「複数性」には二つの種類が存在することが知られている (Nakanishi and Tomioka 2004, Vassilieva 2005)。一つは英語の複数名詞に代表される同質複数 (additive plural) である。(1) の例をみてみよう。

- (1) a. boy-s
- b. child-ren
- c. sheep
- (2) a. \*Mike-s
- b. Kennedys

名詞 boy の複数形 boys は、〈男の子〉という条件を満たす個体が複数存在することを意味し、この複数性の中に〈男の子〉条件を満たさない個体は含まれない。例えば一人の〈男の子〉と一人以上の〈女の子〉によって構成されるグループを boys によって指示することはできない。このような複数性を「同質複数 (additive plural)」と呼ぶ。この同質性は個別の形態の実現形に関わらず、つまり、(1b) のような不規則複数であっても、(1c) のようないわゆる単複同形であっても変わらない。

(2a) のように人名を複数形にすることが一般的に許容されないという事実も、この同質性によって説明される。Mike のような固有名詞は（与えられた文脈の中で）唯一の個体を直接指示すると考えられるので、それに同質複数の -s を付加することは〈唯一無二の個体である Mike〉という条件を満たす個体が複数存在する、という解釈が強要され、意味的矛盾が生じるわけだ。そう考えると、(2b) のようにファミリーネームの複数形が可能であることにも納得がいく。同じ固有名詞であってもファミリーネームの場合は〈(与えられた文脈の中で) 唯一無二の Kennedy というファミリーネームをもつ〉という条件を満たす個体が存在することは可能なのだから、Kennedys によってその家族の複数の構成員を指示することになんの問題もない。ただしこの解釈のもとでは定冠詞 the の生起が義務的となり、この Kennedy を固有名詞として扱うべきか、それとも普通名詞への転換ととらえるべきかについては慎重に検討する必要がある。

### 2.1.1 日本語の複数性

英語のデータだけをみていると何をわかりきったことを、と感じるかもしれないが、日本語の名詞に目を移すと様相は大きく異なる。

- (3) a. 少女-たち
- b. 太郎-たち

(3a) の「少女-たち」の解釈は英語の boy-s と並行的なものだといえるだろう。

〈少女〉という条件を満たす個体が複数存在するときに「少女-たち」が可能である、つまりこの解釈は英語と同じく同質複数である。一方、日本語では(3b)のような固有名詞への「-たち」付加も可能であり、しかもこの場合、もっとも優勢な解釈は〈太郎という名をもつ〉という条件を満たす個体の複数性—同質複数解釈—ではなく、〈太郎+太郎に関係するその他の個体〉という解釈である。例えば太郎、相太、花子の三人から構成される複数性を、「太郎-たち」によって指示しうる。このような複数性のことを「連合的複数 (associative plural)」と呼ぶ。

日本語の「-たち」、あるいはそれを含む複数形式の性質については、その詳細が明らかになっていない点も多い。まず一般的に知られている特徴として、(擬人化を除いて)「-たち」は人間以外への付加が難しい。

- (4) a. \*机-たち  
b. ?金魚-たち

(4a) のような無生物に対する「-たち」付加が奇異に感じられることには異論はないだろう。(4b) のような人間以外の生物に対する「-たち」付加には個人差、特に当該の生物に対する共感の高さのような因子が入ってくるが、その基準についてはここでは立ち入らない。

日本語には「-たち」の他にも複数解釈をもたらず接尾辞が存在するが、これらについても同様の[+人間]制約がかかるように感じられる。(5a)の「-ども」、(5b)の「-ら」はスタイルやレジスター上の違いはあるものの、いずれも問題なく連合複数解釈が可能である。

- (5) a. 太郎-ども  
b. 花子-ら

ここまで複数性を示す接尾辞に注目してきたが、よく知られているとおり、そもそも日本語は複数を表示する義務的形態はもたず、特になんの形

態素も付加せずとも複数性を指示することができる。(6b、6c)において、複数性を要求する述語「集まる」や「殴りあう」と共起していることから確認できるとおり、「学生」はこの形態で複数性を指示している。

- (6) a. 学生が一人で本を読んでいる。  
 b. 学生が広場に集まってきた。  
 c. 教室で学生が殴りあっている。

しかしこのような原形複数指示の場合には、(3b) や (5) で得られる連合複数解釈は不可能である。また日本語には、生産性は低いものの重複 (reduplication) による複数表示も存在する。

- (7) a. 山々、島々  
 b. 人々

(7a) のケースは無生物の複数化なので (4a) に準じて連合複数解釈が不可能であることは期待通りだが、(7b) も同じく、連合複数解釈 (「一人の人間+複数の動物」のような解釈) は不可能である。したがって (3b) や (5) にみられる連合複数解釈は、これらに付加される接尾辞がもたらす効果であると考えるべきだろう。

#### 2.1.2 ピジン・クレオール諸語にみられる連合複数：APiCSを用いて

興味深いことに、ピジン・クレオール諸語でも連合複数がしばしば現れる。The Atlas of Pidgin and Creole Language Structures Online (APiCS Online) によると、連合複数に関して情報が記載されている71言語のうち、46言語がなんらかの形式で連合複数をもつ (APiCS Online Feature 24: The Associative Plural)。

## (8) ピジン・クレオール諸語における連合複数の類型的分類

(APiCS 24 より)

	言語数	率
同質複数と連合複数が同形	29	40.8%
3人称複数代名詞と同形	8	11.3%
連合複数専用の形式	9	12.7%
連合複数なし	25	35.2%
	71	100.0%

さらに英語を語彙供給言語 (Lexifier language) とする25言語 (以降、「英語型ピジン・クレオール」と呼ぶ) に絞ると、その内訳は以下のようになる。

## (9) 英語型ピジン・クレオールにおける連合複数の類型的分類

(APiCS 24 より)

	言語数	率
同質複数と連合複数が同形	13	52.0%
3人称複数代名詞と同形	4	16.0%
連合複数専用の形式	1	4.0%
連合複数なし	7	28.0%
	25	100.0%

上層言語 (superstrate language) である英語が連合複数をもたないにもかかわらず、英語型ピジン・クレオールの7割が連合複数をもつという事実は興味深い。これらひとつひとつの下層言語 (substrate language) の文法特徴をみていく作業は本稿の目的を超えるため別の稿に譲るが、英語型ピジン・クレオールで報告されている連合複数の形態的実現について、APiCS 収録の実例を追っていこう。

まず上の表の中でもっとも言語数の多かった、「同質複数と連合複数が同じ形態で表示される」タイプをみてみよう。なお本節の言語例はすべて APiCS からの引用である。<sup>i</sup>

(10) Creolese 〈ガイアナ〉

- a. *di maan dem a wok* [additive]  
the man 3PL PROG work  
‘The men are working.’
- b. *Siita dem* [associative]  
Siita 3PL  
‘Sita and her friends.’

(11) Jamaican 〈ジャマイカ〉

- a. *Ruoz tel im se a Klaris mash di pat-dem.* [additive]  
Rose tell 3SG COMP FOC Claris smash DET pot-PL  
‘Rose told her that it was Claris [who] broke the pots.’
- b. *Ruoz-dem tel im se a Klaris mash di pat.* [associative]  
Rose-PL tell 3SG COMP FOC Claris smash DET pot  
‘Rose and the others told her that it was Claris [who] broke the pot.’

(12) Nigerian Pidgin 〈ナイジェリア〉

- a. *man dem* [additive]  
man 3PL  
‘men’
- b. *Chidi dem go go Opobo.* [associative]  
Chidi 3PL IRR go Opobo  
‘Chidi and his people will go to Opobo.’

いずれも当該の名詞の直後に複数を示す語—おそらく英語の *them* を起源とする語—が生起して複数性を表示している。それぞれの a. 例は同質複数、b. 例は人名が用いられていることからわかるとおり連合複数であるが、ど

こちらの例でも同じ語が生起していることが確認できる。実例は割愛するが、このタイプに分類された13言語の大部分が同様の特徴を示す（興味深い例外についてはのちほど取り上げる）。

次に「3人称複数代名詞と同形」タイプをみていこう。このタイプに分類される4言語はそれぞれに異なる形態をもつように思われるので、すべての例を提示する。

African American Englishでは、同質複数（13a）は原則として標準英語と同じく接尾辞 *-s* によって表示される。一方、連合複数（13b）は *nem* < and them を名詞に後続させることによって表示される。

(13) African American English

- a. *The Lees left.* [additive]  
       the Lees left  
       ‘The Lees (group) left.’
- b. *Felicia **nem** done gone.* [associative]  
       Felicia ASS COMPL go.PST  
       ‘Felicia and her friends/family/associates have gone already.’

一方バスアツで話される Bislama では、同質複数（14a）、連合複数（14b）、そして単独の3人称複数代名詞（14c）いずれの環境にも *olgeta* < all together が生起する。また同質複数の環境では（14a'）に示すとおり *ol* も可能であることが報告されているが、こちらは連合複数の解釈は許容しない。

(14) Bislama 〈バスアツ〉

- a. *mifala i stap wetem olfala **olgeta*** [additive]  
       1PL.INCL AGR stay with old.one 3PL  
       ‘We were standing with all the old guys.’
- a'. ***ol** haos oli fasfas tumas* [additive]  
       PL house AGR fast very



‘The houses are crowded together.’

- b. *hem i stap wetem Sale olgeta* [associative]  
 3SG AGR stay with Sale 3PL

‘He’s staying with Sale and his family.’

- c. *olgeta oli drong* [3pl pronoun]  
 3PL AGR drunk

‘They were drunk.’

Norf’k の同質複数表示は随意的であることが報告されているが、特に人間を指す場合は標準英語と同じ形態 *-s* も挙げられている (15a)。連合複数 (15b) は AAVE と通底するマーカーが使われており、この *dem* は独立した 3 人称複数代名詞としても生起する (15c)。

(15) Norf’k 〈オーストラリア・ノーフォーク島〉

- a. *iyala-s* [additive]  
 overbearing-PL  
 ‘overbearing youngsters’

- b. *John en dem* [associative]  
 John and 3PL  
 ‘John and his mates’

- c. *dem* [3pl pronoun]  
 3PL  
 ‘they’

Hawai’i Creole も Norf’k と同様のパターンを示すが、連合複数を形成する際、‘and’ を伴わずに直接 *dem* を名詞に後続させることができるようだ (16b)。

(16) Hawai’i Creole

- a. *ai lav dɔg-s* [additive]

1SG love dog-PL

‘I love dogs.’

- b. *mai fade dem justu go [...] se? [...] tə-done?*  
[associative]

1SG.POSS father ASS PST.HAB ACT [...] set [...] turtle.net

‘My father and his friends / those associated with him used to set turtle nets.’

- c. *dei gar-z go bai dem sam sora-z* [3pl reflexive]

DEM guy-PL ACT buy REFL some soda-PL

‘Those guys go and buy themselves some sodas.’

ここまで「同質複数と連合複数が同形」タイプと「連合複数と3人称複数代名詞が同形」タイプをみてきたが、実はこの分類は事実をゆがめて伝えてしまう恐れがある。上記の例（10–12）を振り返ってみると、ここで生起している連合複数マーカーは当該言語の3人称複数代名詞と同じ形態である。つまりCreoleseやJamaicanでは*dem*が、Nigerian Pidginでは*dèm*が単独で3人称複数代名詞としても働くのだ（17）。つまりこの二つのタイプは相互に排他的なものではなく、むしろ包含関係をなす分類ととらえるべきだろう（18）。

- (17) a. Creolese

*som a dem mait kom waan mek - kom in yu shap*

some of 3PL might come want make come in your shop

‘Some of them might want to make - come in your shop.’ OR:

‘Some of them might want to come and make - come into your shop.’

- b. Jamaican

*Dem kaal mi fi kohn elp dem.*

3PL call 1SG PURP come help 3PL

‘They asked me to help them.’

c. Nigerian Pidgin

*Dèm si di got dèm.*

3PL see ART.DEF goat 3PL

‘They saw the goats.’

(18)

同質複数と連合複数が同形：13言語

連合複数と3人称複数代名詞が同形：4言語

このデータ解釈が正しければ、英語型ピジン・クレオール25言語のうち18言語に連合複数が存在し((9)を参照)、さらにその18言語中17言語において、連合複数と3人称複数代名詞が同形である、ということになる。

ここまでの分類にあてはまらない1言語についても確認しておこう。オーストラリア北部で用いられているKriolがその言語である。Kriolは独自の連合複数接尾辞をもち、しかもその接尾辞は同質複数の形態とも、3人称複数代名詞とも異なる。APiCSの記述によれば、Kriolは同質複数を表示する形式として主に三種類の方法をもつ(19)。

(19) Kriol 〈オーストラリア〉：同質複数

a. 接尾辞

*maidi tu, thri dei-s [...] leita.*

maybe two three day-PL [...] later

‘maybe two [or] three days later’

b-i. 限定詞

*D. im med langa ole boi.*

D. 3SG mad LOC PL boy

‘D. is mad with the boys.’

b-ii. 指示詞への接尾辞付加

*Thei bin belt-im im tharrei, thet-lot kid.*

3PL PST hit-TR 3SG there DEM-PL child

‘They hit him over there, those kids (did).’

c-i. 人名詞の重複 (reduplication)

*Dei bin jingg-in-abat dis-lot olmen~olmen-wan.*

3PL PST think-PROG2-about PROX-PL RED.men-ADJ

‘They were thinking about it, these old men.’

c-ii. 修飾語形容詞の重複

*Im=in dal-im ola libwan~libwan kokiroj.*

3S=PST tell-TR all RED.little:ADJ cockroach

‘It told the little cockroaches.’

(19a) の接尾辞 *-s* は標準英語に準じるものだが、APiCS の記述によれば、「一貫性のない、上層言語からの過影響」だと考えられる。(19b) に挙げた限定詞および指示詞についてはいくつかの異形態がみられる (限定詞では *ole ~ ola ~ orla ~ olda*、指示詞では *-lot ~ -lat*) とのことだが、これらの境界条件については立ち入らない。また重複による人名詞の複数化 (19c-i) は日本語を彷彿させるが、修飾語形容詞を重複させることで名詞の意味を複数化させる方略 (19c-ii) も非常に興味深い。

一方、Kriol の連合複数と同質複数とはまったく異なる形式、すなわち、集合をあらわす接尾辞 *-mob* の付加によって表示される (20)。ただしこの接尾辞自体が連合複数の意味を担っているかについては明確ではない。この接尾辞は *X-mob* の形式で *X* に人名、地名、職業名詞などをとり、緩やかに *〈X に関連する集合〉* を指示する。そしてこの *X* の位置を人名が占めた場合、連合複数解釈の効果が得られる。

(20) Kriol 〈オーストラリア〉: 連合複数

a. *Les krip-ap la Sherin-mob.*

let's creep-up LOC Sharon-COLL

‘Let’s creep up on Sharon and her friends.’

- b. *Ol yu Kananara-mob, fo [...] Bredja said*  
 all 2SG Kununurra-COLL for [...] Bradshaw side  
 ‘all you people from Kununurra, [traditional owners] for the Bradshaw country’
- c. *Len-kanjil-mob thei jabi.*  
 land-council-COLL 3PL know  
 ‘The land council people know (about this).’

そして3人称複数代名詞については、(19b-ii) や (20c) の *thei* < *they*、(19c-i) の *dei* < *they* にみられるとおり、同質複数とも連合複数とも異なる形式が用いられている。このようにKriolの複数表示システムはかなり複雑な様相を呈しており、本格的な分析を試みる際にはより網羅的なデータと、現地の下層言語の構造についても詳しくみていく必要があるだろう。

ここまで連合複数をもつ英語型ピジン・クレオールに注目してきた。データが煩雑になってきたので、いったん類型的な視点からその傾向を整理しておこう。

#### (21) 連合複数に関する一般化

連合複数の表示は、すべて当該の名詞に後続する要素によってなされる。

- i. その大部分は3人称複数代名詞 (*them* からの派生形) である。
- ii. 標準英語の *-s* に準じる形式は連合複数解釈をもたない。

この一般化から (22) のような予測が得られる。

#### (22) 連合複数に関する予測

名詞に先行する要素によって複数性が表示される場合、連合複数解釈は得られない。

線形順序と複数性の意味解釈に関するこれらの記述を念頭に、連合複数をもたない英語型ピジン・クレオールの複数形式をみていくことにする。*APiCS Online Feature 24* (The Associative Plural) に記載されている英語型ピジン・クレオールの中で、連合複数をもたない言語に分類されているのは以下の7言語である。

- (23) Singlish 〈シンガポール〉  
 Early Sranan 〈18世紀スリナム〉  
 Sranan 〈スリナム〉  
 Saramacan 〈スリナム〉  
 Ghanaian Pidgin English 〈ガーナ〉  
 Krio 〈シエラレオネ〉  
 Belizean Creole 〈ベリーズ〉

順に複数表示形式をみていこう。Singlishは標準英語に準じる形式が報告されている。

- (24) Singlish
- a. *mouse*; ***mice***  
 mouse mouse.PL  
 ‘mouse; mice’
  - b. *cat*; *cat-s*  
 cat; cat-PL  
 ‘cat; cats’

Early Srananでは複数性は限定詞の複数形 *den* (25a) あるいは名詞の重複 (25b) によって表示される。(25a) の文頭からわかるとおり、*den* は単独で3人称複数代名詞としても使われる。

## (25) Early Sranan

- a. *Den sa musu kali nen fu ala den hedeman fu  
den kondre.*

3PL FUT must call name of all DET.PL head of  
3PL/DET.PL village

‘They will have to mention the names of all the captains of the/their villages.’

- b. *Da-sani habi oro~oro.*

DET.SG-thing have hole.RED

‘It has holes all over.’

Sranan (26a)、Saramacan (26b) でも同じく、複数性は限定詞の複数形—それぞれ *den* と *dεε*—が表示する。ただし Early Sranan と異なり、重複の事例は記載されていない。

## (26) a. Sranan

*den oso*

ART.DEF.PL house

‘the houses’

- b. Saramacan

*di wɔmi; dεε wɔmi*

DEF.SG man DEF.PL man

‘the man; the men’

Ghanaian Pidgin English では語幹の母音交替 (27a)、接尾辞 (27b)、重複 (27c) が確認できる。(27a, b) は標準英語に準じた形式とみなせるだろう。

## (27) Ghanaian Pidgin English

- a. *uman; umɛn*

woman; woman.PL

‘woman; women’

- b. *dat ples, no mɔskito-s*

DEM PLACE NEG mosquito-PL

‘There are no mosquitoes in that place.’

- c. *dɛm dè kam opĩ faktri~faktiri fɔr às*

3PL HAB COME open factory~PL for 1PL.OBL

‘They come and open factories for us.’

Krioには重複（28a）と名詞後続語（28b）が存在する。

(28) Krio

- a. *tfuk-tfuk*

prick-prick

‘thorns’

- b. *pikin dɛm*

child PL

‘children’

最後にBelizean Creoleには、接尾辞（29a）、名詞先行語（29b）、そして名詞後続語（29c）の三種の形式が存在する。

(29) Belizean Creole

- a. *Yu gat li aystaz we grow pan de.*

you got little oysters REL grow on them

‘There are small oysters that grow on them.’

- b. *Sam a dem bway wuda gu awt.*

some of PL boy would go out

‘Some of the boys want to go out.’



c. *Maskin kaal op di sowdjaz dem.*

Maskin call up the soldiers them

‘Maskin called up the soldiers.’

これら7言語の複数表示形式を見比べてみると、上で議論した連合複数をもつタイプの18言語とは大きく傾向が異なることがわかる。3人称複数代名詞由来の複数マーカーが顕著に少なく、たとえそれが生起する場合でも当該名詞よりも先行する事例が多い (25a, 26, 29b)。これらの事例を考慮に入れると、やはり (21–22) で提示した記述的一般化には一定の内実があるように思われる。Krio (28b) と Belizean Creole (29c) のケースでなぜ連合複数解釈が得られないか、についてはさらなる検討が必要だが、少なくともこれらの事例も (21–22) にとつての反例になるものではない。

最後に、線形順序と連合複数の解釈に関連して興味深いコントラストが垣間見える事例として Tok Pisin の例を挙げておく。Tok Pisin は、「同質複数と連合複数が同じ形式である」タイプの13言語の一つに分類されている。確かに Tok Pisin では、同質複数 (30a)、連合複数 (30b)、3人称複数代名詞 (30c) すべての例において同一の要素 *ol* が用いられている。

(30) Tok Pisin 〈バプアニューギニア〉

a. *Askim ol lapun.* [additive]

ask PL old.person

‘Ask older people.’

b. *Mi luk-im Pius ol.* [associative]

1SG see-TR Pius 3PL

‘I saw Pius and them.’

c. *Ol i bin pret long dispela pik.* [3pl pronoun]

3PL PM PST afraid PREP this pig

‘They were afraid of this pig.’

注目すべきは(30a)と(30b)の語順の違いである。同質複数の(30a)では*ol*が名詞*lapun*に先行するのに対し、連合複数の(30b)では人名*Pius*に後続している。この1例のみから結論を出すのは拙速だが、(21–22)の一般化が一定の真実をとらえていることを期待させる例ではなかろうか。

### 2.1.3 まとめ

紙面が尽きたためひとまずここまでの議論をまとめておくと、連合複数解釈の通言語的可能性を考えるにあたって、複数マーカーの生起位置が大きな要因として浮かび上がってくる(21–22)。しかし、名詞句の意味解釈プロセスのなかで線形順序が役割を果たしているとは、少なくとも近年の極小主義的生成文法理論の枠組み(Chomsky 2000以降)のもとでは考えにくい。したがって本稿で提出した一般化を、線形順序に言及しないかたちで統語的観点から定式化することが必要になる。

本稿では日本語と英語型ピジン・クレオール諸語という、ある種極端な言語データのみを取り上げたが、分析の精緻化にあたっては、より多くの言語の比較対照が重要となる。今後はThe World Atlas of Language Structures Online(WALS Online)を用いてさらに多くの言語における連合複数の実現形を検討していく。そのなかで、本稿で提出した一般化に対する反例—すなわち、名詞に先行する複数マーカーによって連合複数解釈がもたらされる事例—を取り上げることになるが、この構造の検討を通じて、連合複数に関わる問題は複数代名詞構文(Plural Pronoun Construction)や共格(Comitative)といった他の構文をも射程にとらえることを論じていく予定である。

### 注

\*本研究は、2024年度実践女子大学理論言語学ゼミにおける学生とのやり取りから得られた着想を書き留めたものである。毎年感ずることだが、自由な発想で私の研究上の関心を広げてくれる学生に感謝したい。

- <sup>i</sup> 例文中の略号は以下のとおり。 3PL=third person plural、3SG=third person singular、ACT=active、ADJ=adjectival、AGR=agreement、ART=article、ASS=associative、COLL=collective、COMP=complementizer、COMPL=completive、DEF=definite、DEM=demonstrative、DET=determiner、FOC=focus、FUT=future、HAB=habitual、INCL=inclusive、IRR=irrealis、LOC=locative、NEG=negation、OBL=oblique、PM=predicate marker、POSS=possessive、PREP=preposition、PROG=progressive、PROX=proximal、PST=past、PURP=purposive、RED=reduplication、REFL=reflexive、REL=relativizer、TR=transitive。

### 参考文献

＊ ＊ 本稿はより大きな研究プロジェクトに向けたアジェンダとして執筆している。そのため以下の参考文献一覧は本稿で直接言及したものだけでなく、今後の議論を見通したリーディングリストとして付している。

- Baptista, Marlyse (2012) “On Universal Grammar, the Bioprogram Hypothesis and Creole Genesis: An interview with Noam Chomsky,” *Journal of Pidgin and Creole Languages* 27(2), 351–376.
- Bickerton, Derek (1984) “The Language Bioprogram Hypothesis,” *The Behavioral and Brain Sciences* 7(2), 173–188.
- Chomsky, Noam (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework,” In *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89–155, MIT Press.
- Cinque, Guglielmo (2018) “On the Merge Position of Additive and Associative Plurals,” In *From Sound to Structures: Beyond the Vail of Maya*, ed. by Roberto Petrosino, Pietro Cerrone and Harry van der Hulst, 495–509, De Gruyter.
- Corbett, Greville G. (2000) *Number*, Cambridge University Press.
- Michaelis, Susanne, Philippe Maurer, Martin Haspelmath and Magnus Huber (eds.) (2013) *The Survey of Pidgin and Creole Languages, Volumes I–III*, Oxford University Press.
- Nakanishi, Kimiko and Satoshi Tomioka (2004) “Japanese Plurals are Exceptional,” *Journal of East Asian Linguistics* 13, 113–140.
- Nomoto, Hiroki (2013) *Number in Classifier Languages*, Doctoral Dissertation, The University of Minnesota.
- Overstreet, Maryann and George Yule (2024) “Associative Plural Marking in English Varieties: Investigating the Expression of Group Reference,” *English Today* 40, 122–126.

- Stolz, Thomas, Cornelia Stroh and Aina Urdze (2006) *On Comitatives and Related Categories: A Typological Study with Special Focus on the Languages of Europe*, Mouton de Gruyter.
- Syea, Anand (2024) *A Comprehensive and Comparative Grammar of English Creoles*, Routledge.
- Turgay, Tacettin and Balkız Ozturk (2020) “Structure of Plural Pronoun Constructions,” in *Morphological Complexity within and across Boundaries: In Honour of Aslı Göksel*, ed. by Aslı Gürer, Dilek Uygun-Gökmen and Balkız Öztürk, 155–189, John Benjamins.
- Vassilieva, Maria (2005) *Associative and Pronominal Plurality*, Doctoral Dissertation, Stony Brook University.